

物とす。蓋し牛族は犍猛の獸類に屬し、就中臺灣に於けるものゝ如きは、實に猛惡なる相貌を呈し、觸れば將に突進せんとするに似たり。之に反して此地の家牛は温顔實に佛の如く、其の愛らしき眼、其の穩かなる狀貌は、實に特長と稱すべし。然り彼等の能く是に至りたる所以は、元來ヒンヅー(カシミヤ)にはヒンヅー少きも印度全體より見れば之に反す、人は牝牛を以て神に配し、束縛緊留は愚か、丁寧親切を越えて崇重尊敬至らざるなし、是に於てか、彼等は欲する所に歩み、又欲する物を取り食ふも、何人も之を叱咤せず。されば行くとして牝牛の徘徊せざる無く、徘徊するも決して人に害を及ぼすこと無し。唯牝牛のみは使用に充てらるゝも、牝牛既に神と崇めらるゝ程なれば、神の配偶なる者如何ぞ呵責鞭撻等を受くるの理あらんや。是れ一に彼をして温乎たる佛相を示すに至らしめたる所以ならん、牛族も此の如き地に生れては、眞に幸福の物なるかな。

七 稻垣中佐と會合

二十九日稻垣騎兵中佐カルカッタより來り迎ふ。予喜びに堪へず、先づ原氏を紹介し、三人鼎座、快談湧くが如く、頓に異域の客たるを忘る。暫くして卓上杯盤を運